

---

# 麻帆良戦記ディスガイア

イヤバカン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

麻帆良戦記ディスガイア

### 【Zコード】

Z7582K

### 【作者名】

イヤバカン

### 【あらすじ】

魔王となり魔界を収めたもののやることのなくなってしまったラハールは再び眠りについてしまった。  
そこに忍び寄る影！

調子にのつて書き始めました。人生で2作目、特に勉強もしないまま筆を取り始めたので前と同じようにダメダメになる可能性も・・・でもがんばります。

## 超魔王捨てられたる（前書き）

少々後悔している、でも書きたかったんだ！

キーワードに入れている『残念な描[写]あり』つてのは結構気に入ってるんだ

どうでもいいよね・・・『めん

## 超魔王捨てられる

ヂヂヂ・・・

ウイイイイイイイン・・・

パンッパンッパンッ・・・

死ねええええ・・・

ウルサイ、オレ様の部屋を改装するような予定などあつたか?  
まるで自分の隣で工事が行われてこりよつな・・・

ドリルの音かと思えばヒーロンソーのような、中には銃声やらいか  
にもアホそうな声まで聞えたよつな。

くつそお小さい癖にいつの間にか頑丈になりやがって・・・あつそ  
うだ捨ててきてしまえばいいんだ。

やつと静かになつた、ただ急に冷えだした。まあこの程度、超魔王  
になつたオレ様には涼しい程度だがな。

さよなら魔王様～プリンの恨みは恐ろしいのだ！時空ゲートをこの世界以外のランダムにしてつと・・・よし、でわ行つてらっしゃいませ魔王様、魔王城は私がもううわっ！

ポイッ！

アホな声が聞えたと思つたらすぐには静かになつた、これで静かに眠、  
れ・・・る。

100年後

「ねえ、これは何かな？チャチャゼロ」

そこには、某魔神に捨てられてからも動くことなく寝続けた結果、砂に埋もれ、雨に晒され続けた結果、自称超魔王を名乗つてゐる人物は100年の長い年月によつて表面を石のように硬くなつた土に覆われてしまつてゐるのだった。

そしてそれを見つけたのは吸血鬼化してまだ十数年ほど、後のドールマスターの異名を持つことになるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとその従者チャチャゼロだった。

「サアナ、デモコノ魔力はスゲエゼ御主人。モツテ帰レバ何力使イ道ガアルカモシレネエゼ」

「言葉遣いはもうちょっとどうにかならないの？でもそうだね土に覆われているみたいだけど形から見るに人が入っているのかな？」

「御主人ハコレカラ何百年ト生キルンダゼ？言葉ナンテスグニ荒クナルツチマウツテ。ソレヨリコイツハ人ジャナイダロ、随分ト長イ間ココニ横タワツティタンダロウゼ、デナケリヤコンナ土ニ覆ワレネエツテ」

「言葉遣いは兎も角として。とにかくもつて帰るう、これだけの魔力を私が使えるようにできれば自分の身を守るのに使えるはず」

「アーアー、御主人ハ考エガ甘イゼ？マツ考エ方モ時間ガタテバ・・・」

「もう、文句言わないで足を持つて！もつて帰るよ」

「ヘイヘーイ」

それから100年後

「うーん、うまくいかない。なあチャチャゼローー100年も研究してなにか思いつかないか？」

「知ラネエヨ、ソレヨリモソイツノ魔力ヲ隠スアイテムヨ早く作ッ  
テクレ。ヤツラ、ソイツノ魔力ニ氣ガツイテウジャウジャ集マツテ  
クルゼ」

「わかつたわかつた、でもこちらは100年も戦つてゐんだ、國から軍でも出されない限り大丈夫だろ」

「最近ノ御主人ハマツタク戦ツテナイダロ！マア切り刻ムノモ悪ア  
ネエケドナ」

「おいつ言葉遣い！つたく100年行つてもわからないのかチャチ  
ヤゼロ」

「・・・御主人モスグニコツチ側サ、マアイイ。掃除二行ツテクゼ

「はいはいっすぐ終わらせて来いよ」

さらに100年後

「つたくこの士男、魔力はあるはずなのに多すぎて私の作ったアイテ  
ムが壊れるじゃないか。壊して意識が戻ると困るから手が出せないことをいいことに意識があるんじやないか？」

「ケケケツ、御主人モ段タト染マツテキタナ」

「ん？ 何んのことだ？」

「何デモネエヨ。ソレヨリ御主人、今日は軍ガ動イテルミテエダゼ  
？チョット俺一人ジヤ厳シイゾ」

「ちつココに気がついたのか、別の場所を探さないとな。さつさと  
終わらせるか、行くぞチャチャゼロ！」

「オウヨツ！右側ハ俺ニヤラセテモラウゼ」

そこから100年後

「おーいチャチャゼロ、このゴミをどこか倉庫に入れるぞ。期待は  
すれど、コイツ役に立たん！」

「諦メルノカ御主人」

「こいつに100年も時間を費やすより魔法を開発したほうが効率  
がよさそうなんだ。それにこいつの魔力、かなり禍々しくて私には  
使えそうに無い」

「ケケケツ、コイツ闇魔法ナンテノ使エタリスルンカモナ」

「闇魔法・・・か。それだチャチャゼロよくやつた。次の魔法はソ  
レで決まりだ！」

「コイツハドウスンダヨ？」

「そんなものそこらにでも転がしておけ」

「了解ダゼ御主人」

またさらに100年後

「闇魔法も完璧になつたな！この魔法は魔力許容量が膨大な私にはなかなかに使える！」

「ヤツタナ御主人。デモヨ、ナンデ闇魔法ナンテ思イツイタンダ？」

「ん？何か理由があつたような……いや、私が天才だからだ！」

「自分で言ウコトカヨ」

「うるさいーしかしこれで私達は堂々と『悪の魔法使い』を名乗れるな」

「ケケケツ、御主人ニハオ似合イの称号ダナ」

「なんと言つても私達は……」

「『『『誇りある悪』だからな！』」

「フハハハハハハハハハハ！」

「ケケケケケケケケケケ！」

それから100年後

「なあチャチャゼロ、暇だから昔やり残していた研究をしようと思つているのだが・・・何だつたか覚えていないか？」

「ケケケツ、俺が覚エテルワケネエジヤネエカヨ」

「そりゃ、なら今考えている奴を作るか」

「ン？ 何力新シイコトヲスルノカ？」

「フラスコ型の別荘で通常とは違つた時間の流れを作り出そうと考え中だ」

「オイオイ、俺ラハ時間ナンテ余ツテルダロウニワザワザ・・・

「研究して作るのがいい暇つぶしになるんだ、別にお前は手伝つたことないのだから文句を言うな」

「昔ノ純粹ダツタ御主人ガ恋シイゼ」

「つむきこぞチャチャゼロー！」

そこからまたまた100年後

「くつそお、なぜだナギ！」

「わりこな、お前の荷物も学園の方には送つておこでやるか？」「

結局どれだけ言つてもナギの一方的な会話で話は打ち切られ、そのまま麻帆良学園都市に送られることとなつた。

「ちつ納得はいかんが3年の辛抱、気分だけでも味わうつもりで行つてやるか」

「ケケケッ、俺ハ3年モ置物扱イカヨシマンネH」

それから15年後

「まったく、あいつはどうして何をしてるのだ…3年のはずが15年になりあいつの子供が来るそうじやないか…」

「マスター」の大型の土はびりしましょ?」

「私は機嫌が悪いんだ！特に魔力を感じないものなら必要ないからまとめて家の裏に行つて燃やしてしまえ！」

「人型の胸についている白い羽のバッジからは微弱ですが魔力を感じるのですが・・・」

「ああ、それは昔私が作つたマジックアイテムだ。何のために作ったか忘れたがそのまま燃やしてもかまわん、耐熱加工してあるから燃え力スを最後に探せば残るはずだ」

「了解しましたマスター、それでは行つてきます」

「今回の妹はどうだ？お前に比べて随分といい子じゃないか

「ケツ、御主人が頼りナイカラ妹ハアンナ性格二ナツタンドゼ。ア  
マリ苦労サセンナヨご主人」

「ならお前の性格はなんだと言つのだ、昔から言つことを聞かないではないか

「お前は昔から口が悪いと・・・  
「マ、マスター！」

「昔ノ御主人ハ優シカツタゼ。今ハ捻タ性格二ナツテルケドナ」

「ん?どうかしたのか茶々丸」

「あの、マスターから燃やすように指示のあつた人型の土、その中

から人が出てきました！

「なに…どういう理由で土の中に居たのかしらないが殺してしまったのなら仕方が無い」

「いえ、呼吸をしているようなので恐らく生きています」

「なに？ チャチャゼロ以前に作った失敗作か何かか？ しかし呼吸とわ一体……」

「うーむ、よく寝た！ つ眩しい！ 誰かつ誰かカーテンを閉めろ！」

エヴァ達が外に出ると、そこには子供が駄々をこねているような動きで、手で目を覆いながらも足をバタバタとさせている情けない子供の姿があった。

「私の全盛期ですら二三つの魔力には届かないだと、おい貴様！ 何者だ！」

その声に駄々をこねてている動きをしていた人物が気がつくと、自分を見下ろしているのが気に入らないのかすぐに立ち上がり、腕組みをし強者の余裕を出そうと思つてか、先ほどとの失態など気にすることなく不敵な笑みで見下ろす。

しかし、残念ながら身長はどちらもほぼ同じ位なため、見下ろすと言えるか微妙なほどでしかない。

しかし先ほどまで魔力を隠すバッジが体にのつていたからいいものの、立ち上がることで外れてしまつたため恐ろしいほどの魔力が相手を中心に渦巻きだした。

しかし600年も生きているエヴァも、今まで強者として生きてき

たプライドのためか、負けるものかと虚勢をはつて相手をじりみ続ける。

「ハーツハツハツハ！ オレ様が何者かだと？ いいだろつ答えてやる。俺様は超魔王の称号をもつ魔王の中の魔王、ラハール様だ！」

## 超魔王捨てられる（後書き）

前より綺麗にかけたような気がしないでもない・・・

ただプロット考えないと前みたいなことになってしまつかもなあ

## 魔王の悪とは？ラハール悪の道を進む！（前書き）

エヴァも書いているんですがノリで加持をやつたりやつたのでその後に困ります。

んでまだ始まつたばかりの「モチラはモチベも高めなので指がパタパタと動いていつの間にか区切りがいいところまで・・・

短くても区切りがいいところでやめようと思つ

3000字とか決めたら足りない分ムリに進ませて良くないわ

## 魔王の悪とは？ラハール悪の道を進む！

「なに？魔王だと？それも超魔王とはなんだ、ガキの悪魔じゃあるまい？もつとマシな嘘をつくんだな、その程度の嘘人間のガキ程度にしか通じんぞ」

魔界は確かに存在するし上下関係もある、しかし上下関係は自分と同じ種族のみでアニメやゲームのように種族を無視して魔物を纏め上げるなんてことはなく、一部の例外を除いてはケンカ仲間のような相手でしかなかつた。

実際はケンカでさえも召喚先での場合に限り、魔界での死は存在の消滅を意味するため暗黙の了解で不干渉となつているのだ。そのためトップに立つ者でも種族の長程度なのだ。

「ガキではない！魔王それも超魔王の称号を持つ魔王に向かつて偉そうな態度を取りやがつて、不機嫌だ城に帰るぞエトナ、フロン・・・・」  
「……」

「フン、言つておぐがここから簡単に逃げられると思つなよ？経験不足は否めないがそれでも才能のある魔法使い達がお前の魔力に気がつき続々と集まつてきている、貴様を捕らえ、その魔力を私の研究に役立たせてもらうぞ」

「む、オレ様の剣がないではないか」

「つて、おい！無視をするな！」

「剣よ、来い！」

「何も来ないな・・・貴様、さてはアホだな」

「違うわっ！剣の奴は封印でもされているのか？しかたない・・・  
ハアツ！」

ラハールと名乗る悪魔から膨大な魔力が溢れだしたかと思つと、突如地面が揺れだした。

「なつなんだ？貴様何をやつている！」

「剣を呼んでいるだけだ、おつ来たな」

ドンッ！

地面から何か飛び出してきたかと思つと、その剣からは神々しいまでの光を纏いながら舞い降りていた、しかし神聖な雰囲気を持ちながらも奥底に邪悪な力でも眠っているのか、光で覆われている下には消えることが想像できないほど力強く黒く光っていた、恐らく光の方は高位の魔法使いが数十人と集まつり何重にも封印の魔法がかつているのであるう、その者達が命を懸けてまで封印に力を注いだためかナギの封印すら軽く超えるほどの強固な封印がかけられていた。

その封印魔法は肉眼で確認できるほどで、剣が纏つて居る光の中にうつすらとだが鎖が見えていた。

「ちつ、氣味の悪い光だ・・・まったくオレ様の剣にこんなゴミを巻きつけおつて」

そう言い、ムンズ！と鎖を握ったかと思ったことも無いのかのように鎖を千切り、そのまま放り捨ててしまった。

「なつー！あれほどどの封印をあつたりと破壊するなど信じられん」

「だから言つただろうが、オレ様は魔王の中の魔王呼ぶときにはラハール様と呼べ！」

たしかにこれほどの魔力を持つてゐるのなら魔王と名乗つてもおかしくないのかもしれん、これほどまで違うとは・・・魔王の存在も否定できんな。

しかし悪魔にもプライドはあるだらう、ましてや魔王ならば・・・。

「おい、お前を長い間私は匿つてやつたんだ。礼として私にかかる封印を解いてくれ」

「ん？よく見れば人間ではないのか。しかしバカか？オレ様がお前の封印をわざわざ解くわけがなかりつ」

「何？悪魔であつてもプライドはあるだらうへ、貴様は魔王でありますからプライドがないのか？」

「有るに決まつてゐるだらうがー、だからこそオレはいい子のようない行いはしないのだ、なんたつてオレ様は魔王だからな！ハーツハツ

ハツハー！」

ちつ、誤算だ。コイツにとつては 魔王＝裏切り、非常識、非道だから普通の者とは逆の価値観を持つてゐるのか。

むつ、ならそれを逆手に取れば・・・。

「ふう、貴様はいい子ちゃんなのだな」

「何ー」のオレ様をいい子ちゃんだと、バカにするなー。」

「どうかうじう見てもなー貴様はまるで周りのお手本のよひなやつだー。」

「マスター、演技があまりに下手」「うるさいこーー。」

「オレ様のどこが周りのお手本のよひなんだ、言つてみろー。オレ様は今までお手本になるよひなことをしたことなど一切ないー。」

「魔王は普通の悪魔よりもよほど悪いことをするのだうへー。」

「当たり前だー魔王だからなー。」

「だからだーお前は魔王の手本みたいな奴だ、魔王の鏡だ、魔王の職に従順だーそれがいい子ちゃん以外のなんなんだー。」

「なあつー。」

「魔王とこう職業を全否定し裏切る恐ろしい行為、『相手の為に死くす』無償の奉仕など一度もしていないだらうーだから貴様は魔王の『いい子ちゃん』なんだー。」

「しつしまつたあああー。」

ラハールの称号が『いい子ちゃん(偽)』に変わった。

「フフ、貴様にはお似合いの称号だなーだが私は吸血鬼だが慈悲を与える裏切り行為をしよう・・・貴様に私の封印を解くといつ魔王に対する裏切り行為をさせてやるー。」

「吸血鬼だといつに慈悲の心だと？なんて感ひしいやつだ！封印は解いてやる、だが感謝はせんぞ『いい子ちゃん』の称号を早く消し去りたいからな」

「バカめ・・・私の封印を解いてお前は感謝するからこそ魔王としての裏切り行為なのだろ？？」

「そっそっだつた！なんだか腸が煮えくり返る思いだが・・・ええい！ありがとづー！」

「ふふん、私にさりに感謝するがいい！」

「くわくわおおお、ありがとおおおー！」

「フハハハハハハハハハ！いいぞいいぞ、その感謝受け取つておくとしようが、私の心は広いからなー！あ封印を解くのだ！」

「オレ様が『奉仕の心』でオマエの封印を解く！オレ様はこれから生まれ変わるので、これから次々と立派な悪行を成してやるー！」

「すばらしく心がけだー！さすが魔王、悪魔の行ないとは真逆のすばらしい裏切り行為だー！」

「当然だ！ほらオマエの封印も解いてやつたぞ、感謝はいりござー！ハーツハツハツハー！」

ラハールひとつではエヴァにかかつっていた封印もたいしたことはなかつたのかいつの間にか解かれていた。

「なるほどな、親父が昔言っていたのはこうこうのためだったのか・・・しかしなぜだらう、田から汁が・・・」

「おお、魔力が溢れてくるぞ！しかし奴らに見つかるとどうするさいが幸いここにはあいつに付けていたバッジがあるからこれを使うか」

エヴァは自分の魔力が戻つてうれしいのかラハールのことなど無視し、一人悠々とバッジをつけ、ラハールはひつそりと涙を流していった。

エヴァがバッジをつけ終わつたところで、魔力を警戒して少し離れた位置で周りを囲むように魔法使い達が集まってきた。

その中の一人代表してか前に出てきた。その男は両手をポケットに手を入れているのに全身からはラハールに対し敵対心むき出しのオーラが出ていた。

「やあエヴァ、そちらの彼は知り合いかな？」

魔王の悪とは？ラハール悪の道を進む！（後書き）

ラハールが・・・

個人的に面白い具合に話が転がっていく感じです

仕事さえなれば・・・・・・悔しい！

配になつたやうにひらがなを見てこる（前書き）

眠い・・・

でも日曜の夜にむづくじ寝ることができるようになんとか書き終わりたかったんだ

後日できが悪いと思つたり評価がわるかつたら修正するかもしれません

いです

配になりたそつじてばかりを見ている

「やあエヴァ、そちらの彼は知り合いかな？」

「タカミチか、それに正義の魔法使い様たちも脇間からお出ましとは『』苦労なことだ」

「…………質問に答えてくれ、彼は知り合いなのか？」

「そうだな、600年ほど前からの付き合いになるか

「そんなに昔からの知り合いでいたのか、それで彼は『』ばかりに害をなす存在かな？」

「ふん、田の前に相手がいるんだから本人に聞け」

「ああそうだったね。こんにちは、手荒なことはしたくないから話で解決してくれると助かる。まず質問なんだけど君の名前を教えてくれないか？」

恐らく理解を超えている相手の魔力量に緊張しているのだろう、礼儀正しい彼が自身の名前を出さずに相手の名前を伺っていることからもかなり緊張していることがわかる。

「ん、なんだ人間？オレ様は貴様に用などない、わざと消える」

「ぐつ……」

一瞬頭に血が上り相手に一撃入れてしまおうかと脳裏をよぎったが、

経験は少ないが本物戦争や戦場を見てきていたため、なんとか自分を抑えることができた。

しかしほかの者達は格上との戦いは経験しておらず、全員でかれらもしくは最初に一撃入れてしまえばなんとかなると思つてしまつていた。

「悪魔め俺達を前にして調子に乗るな、これでも食らえ！」

「まつ待つんだ Gandalf 二君！」

タカミチの静止に反応する前に魔力を込めた弾丸が発砲してしまつた。

パンッパンッパンッ！

腕は悪くないのだろう。筋力の鍛えにくらい頭部に放たれたら普通なら、あのタカミチでさえ耐えられないだろう。

しかし運が悪いことに彼は人間ではなく、その体に傷一つつけることができなかつた。

「ぬ？ なんだ貴様は、死にたいのならわざわざケンカを売らんぞともいぐらでも殺してやる」

剣先を先ほど発砲してきたGandalf 二と呼ばれた男に向け、ラハールはゆっくりと歩き出した。

当然ラハールの言動から何をするのか理解はできたが、ラハールが殺そうと意識しているためか無意識に魔力が高まり、他の魔法使い達の動きを止めてしまつていた。

そしてそのまま・・・。

サクッ！

「ぐああああああああ」

その剣先はゆつくりと心臓の位置に差し込まれたが、ラハールの魔力怯んだのか運良く体勢を崩したため、左肩から先が切り落とされたが心臓に剣が突き刺さることはなかつた。

「オレの腕が・・・取れ・・・た？」

「動いたらうまく当たらないではないか。慈悲深いオレ様が苦しうよう一息に殺してやるひつと言つのだ！」

「うわあああああああ！」

恐怖からか痛みからなのか、恥も外見も無く大声で叫びながらジリジリと後退りする。少しでもその場から離れようとバランスの取れない体で必死にもがいていた。

しかし慈悲にも（本人にとつては慈悲深く）息の根を止めようとしたハールはガンドルフィーに歩み寄っているため、周りの魔法使いも近寄るに近寄れない状態だった。

「エヴァ、知り合いなのだろう？彼を止めてくれ！」

「フン、そちらから攻撃してきたのだぞ？まあいい貸し1つだからな。おいラハール、そいつはまだ死にたくないそうだやめてやれ！」

「なんだそうなのか？まったく紛らわしいことをしゃがつて。まあオレ様は慈悲深いから回復させてやるひつ”オメガヒール”

「ぐあああ・・・あ・・・腕が治つ、うふつ魔力が溢れ・・・て・・・  
・・・オエエエエエ」

ラハールの下に魔方陣が描かれたかと思つと、魔方陣が淡く光だし  
ガンドルフィーーが目に見えて体調が回復してきたかに見えたが、  
魔方陣の光が次第に強くなつていき辺りあたり一面を光で覆い尽く  
した数分後、また元の薄暗い森に戻つていた。

しかしそこにいたのは痛みや恐怖で怯えた顔でもなく、胃の中の物  
をすべてぶちまけ、全身からは異常なほどの汗が噴出し、目は死ん  
だ魚のような・・・生氣のカケラも無い男がそこに倒れていた。

「ハーツハツハツハ！貴様なんて顔をしておるのだ・・・『冗談だそ  
んな顔をするな、顔色が悪いのは色黒なのだろう？わかつておるわ。  
しかしそのアホ面気に入つたぞ『オレ様バッジ』をくれてやるう。  
これで貴様はオレ様の配下だ」

そう言つとラハールの顔が写つてゐるバッジをガンドルフィーーの  
服に勝手に付けると満足したのか我が物顔でエヴァの自宅へと入つ  
ていつた。

「まったくあいつは自分勝手な・・・茶々丸、あいつが変なことを  
しないか見張つておけ」

「ですがマスター・・・」

「心配せんでもタカラミチのやつはバカではない、どうせじじいを交  
えてのくだらん会話をするだけだ

「了解ですマスター、お氣をつけて」

「ああ、下つ端共が暴走するかわからんからお前も気をつけておけよ。でわ行つてくる」

「おっおい、エヴァまだ彼が……」

「「」の森から奴を出すのか？瞬間に暴れられたら一般人にも被害がでるかもしねんぞ？」

「…………」

「奴にとつてオマエはただのか弱い人間で、紅き翼の英雄達の一員だと特別視してくれるのは一部の人間だけだ。あまりいい気になんなよ」

「ふう……わかったよ。みんな数人の監視を除いて解散してくれ！あとで魔法先生で監視をする順番を決めるから一時間後に学院長室へ！」

タカミチの解散の許可が出ると、すぐにでも緊張から開放されたいのか魔法使い達はすぐにその場から立ち去つていった。

「それにしてもエヴァが忠告してくれるなんて珍しいこともあるもんだ」

「別に死にたければ好きにしろ。ただお前はあいつらほどの才能がないんだ、英雄が相手をするような敵が現れて『戦いたい！』と興奮するのもわかるが、残念ながらお前にはムリだ」

「ハツキリ言うなあ、自分でもわかってはいるんだけどどうぱり心のどこかで諦め切れなくてね……いつかは彼らのようにして」

「フン、貴様のことなどどうでもいいから私の家の前で張り込む気満々なあの一人をどうにかしろ。もしラハールに襲い掛かつてあいつが暴れたら私の家どころが学園など木つ端微塵だぞ」

「どうでもいいってそんな・・・。えーっと残っているのは高音君だなもう一人は・・・ああ刹那君か彼女達も熱心だなあ」

「私は先に行くぞ」

「ああ、帰るように説得したらすぐに行くから学園長にはそいつを教えておいてくれ」

「早く来いよ？でなければジジイの寿命が減つて死んでしまうかもしれないからな」

「ん？エヴァそっちは方向が違うじゃないかい？」

「気にするな」

「おーい君達、悪いが今日のところは引いてくれないか？常に監視されていると彼の暴れる原因になるかもしれないんだ」

「高畠先生、でわ彼の監視どつするのです！？被害が出てからでは遅いのですよ！」

「離れた位置で魔法先生方が交代しながら24時間体制で監視するし、僕も暇を見つけては監視に加わるから君たちは心配しなくていい

い。それよりもこんなに近くで相手にプレッシャーをかける方が危険だ。今日はもう授業も終わる時間だから部屋に戻りなさい」

「……わかりました。ですが何かあれば呼んでください、お手伝いしますわ」

ひえええええええ、いつの間に封印が切れたんじゃああああ。

「ありがとうございます、刹那君もいいね？」

タ、タカミチく・・・・・タス・・ケ・・・・・・テ。

「はい、ですが私にも何かあれば連絡を・・・お嬢様になにかあってはいけませんから」

二人はそういうと寮の方へと向かっていった。

「さて、何もないはずなのになぜか嫌な予感がする。急いで学園長室に向かおう」

タカミチが立ち去ったあの森には、断続的に聞えてくる悲鳴が子守唄となつて、ラハールを心地よい眠りに誘つたのだった。

配になつたやうにばかり見てゐる（後書き）

無慈悲なことを慈悲を持って行つラハール

長年の鬱憤を晴らすかの』とく森の奥へ向かつエヴァ

自分の正直な気持ちを『どうでもいい』の一言でぱりさり切られた  
タカミチ

そして何者かの悲鳴

次回どうなる！（何も考えてないので今のオレにもどうなるかサッ  
パリ

悪い奴ほど裏がなく、いい奴ほど裏があるー オマケ付き（前書き）

なんかしらんがオマケまで書いてしまった。

悪い奴ほど裏がなく、いい奴ほど裏があるー オマケ付き

### エヴァ 宅前から解散後の夕方

「悪いなタカミチ、ジジイの奴を連れてくるのに手間取った」

「ああエヴァ、学園長を連れてきたのか・・・って学園長  
！？」

タカミチは、エヴァの後ろを付き人のように数歩下がって入ってきた学園長を見て驚いてしまった。学園長の田中ひびく濁つており、何かブツブツと喋つていた。

「生まれてきてごめんなさい、生きていてごめんなさい、こんな頭でごめんなさい」

「・・・ハッ！エヴァ、学園長は一体どうしたんだ？」

するとiPadを取り出すと得意げに話出した。

「なにやら孫娘に「頭がキモチワルイ、うちとつても恥かしいわ。こんな老いぼれさつさと死ねばええんや」と24時間ぶつ続けて言われ続けたのがショックだつたらしいぞ」

よほど楽しかったのか零れんばかりの笑みを浮かべているが、学園長の近右衛門はその声を聞くと条件反射で体をビクリと震わし、全身から汗が出ててしまつぽじのトライアになってしまっているようである。

「それを24時間！？」

タカミチ達がエヴァ宅から解散後、近右衛門はエヴァによりて制裁を加えられ、別荘につれられるとすぐにイスに縛り付けられヘッドホンを装着、先ほどの言葉を延々と聴かされ続けた。

最初は茶々丸など高性能の機械で声を似せて作ったのだと笑っていたのだが、一時間もすると心の余裕が無くなり、焦りからか自然と口数が多くなった。3時間後には聞えるはずのない孫娘に向かって泣きながら大声で許しを請いはじめた。12時間を突破したころにはもうひたすら先ほどの言葉を呟いていたのだが、エヴァが許すことなくそのまま残りの12時間も放置されていたのだった。

「エヴァ、君がやつたのだろう？何をそんなに怒ってるんだい？」

「フン！ナギが私に登校地獄をかけたのはしつているだろう？あれは学園に通うようにするためだ・・・なのになぜ私は魔力が使えなかつたんだ？」

「・・・・・」

「学園結界のメンテナンスの時にだけ戻る魔力、恐らく認識阻害の魔法を私にかけていたのだろう？情けないことに、この15年間全く気がつかなかつた。おそらく茶々丸には禁止ワードにでもして喋らせないようにしていたのだろう、これが許せるものか！そして、お前の学園での立場が幹部的な位置である事を考へると、お前もこの事を知つていたのだろう？」

確認を取るような言い方ではあつたが関係していることを確信していたのか、きつい眼つきでタカミチを睨んでいた。

「・・・すまない」

「今更謝罪などいらん。それに封印も解けたことだ、ナギにも相応の処分を下してやりたいがナギの生死がわからんからな、奴の息子に責任を取つてもうつと/orするか。ちょいと奴の息子が来る予定らしこんな」

恐らくタカミチがあわてる姿に確信があつたのだろう、今度は一変してニヤニヤしながらタカミチの反応を楽しんでいた。タカミチも長年の付き合いから、エヴァが自分の反応を期待してその発言をしたとわかつてはいても、予想通りの反応を返してしまつ。

「封印が解けたのか！？いやそれよりも待つてくれ、ネギ君は何も知らないことなんだ。父親のことをだいぶ尊敬しているようだし頼むから彼を傷つけるようなことはしないでくれ」

「ほう？あんな奴を尊敬しているのか。まあ子供を虐めるような事はほどほどにして現実を教えてやるだけだ。『英雄の子供』だと育てられてきたのだろう？だいぶ他とは違つて歪んでいるだろうな。ここを出る予定は今のところないからな、暇潰しに英雄の子供とやらを教育してやろう」

「虐めるのはほどほどでもやめてくれ。それに彼は英雄の息子で間違いないけれど、ネギ君はネギ君なんだ・・・あまりその呼び方は好きじゃない」

「フン！お前も英雄の・・・ナギの息子だから会いに行つたのだろう？私も、名前がネギで子供だ・・・と聞いただけで関わりたいなどとは思つはずが無い。その息子のネギが親を超えるほど偉業を成し遂げたとしても・・・それでも奴は『英雄の息子が 当然 英

雄になつた』と言われるだけだ、一生な

「しかしネギ君にそんな・・・」

「私はまだ会つたことすらないんだ、先入觀が『英雄の息子』から入るのもしかたないだろ？それに今はあの悪魔、ラハールの扱いについてだろ？そっちの話に切り替えるぞ」

「わかつた。まずはあの悪魔はラハールって言つんだね？それで種族は？」

「さあな私もそこまで知らん・・・600年前に会つてはいたが会話をしたのはお前らが来る少し前からだからな」

「そりだつたのか。それじゃあ彼の魔力・・・おそらくナギさんさえ超えているようだけどエヴァや僕達、学園全員でかかれば抑えられるかい？」

「あいつの回復魔法しか見てはいない、しかもしも攻撃の魔法を出せるのだとしたらまず間違いなく勝てない。それが子供がなら初步の魔法、サギタ・マギカでさえ奴が魔力を込めれば1発の威力が・・・タカラミチ、お前でもやられるぞ？」

「それほどまでに・・・それじゃあエヴァ、君は彼を呼んでどうするつもりだったんだい？」

「どうするとと言わても私だって呼び出すつもりなど毛頭なかつたが不慮の事故でな」

「不慮の事故？」

「そう、あれは不慮の事故なんだ。600年も前に感じた魔力など覚えているはずが無いさ・・・焼却しようとして目覚めてしまったとしてもあれは私のミスではない」

視線をはずしてその場を凌いでとする姿に、タカミチはついため息が出そうにはなるがそれを堪えて話を続ける。

「出できてたのはしかたない。再び彼を元にもどせるかい？」

「日本中から睡眠薬でも持つてくるか？」

「彼は寝てたのかい？600年もー？」

「私が見つけた時には、既に固くなつた土に覆われていたんだ、恐らく私が見つけた600年前よりもさらに以前から寝ていたのだろう」

600年前から寝ているのにも驚きだがそれ以上と聞くと苦笑するしかない。

「それじゃあ600年も寝てる彼の年齢はどれくらいなのかな？それに彼の種族は？それがわかれば対処法があるかもしねい」

「奴の年齢はしらん。そして奴の種族だが魔王だそつだぞ」

「魔王？それは種族とは違うと思うが」

「なら超魔王だそつだ」

「エヴァ……」

タカミチは可哀相なものを見るような目でエヴァをやせこく見つめた。

「おい、奴がそつたんだぞ！嘘ではない！そんな目で私を見るなああ！」

「ハハハ、エヴァそん、ヴォエエエ」

エヴァが腕を振り回しながらタカミチの胸を叩いた。

今までの魔力が込められていない拳など、特に構えることなく受け止めることができたのだが、これまでと違い相当の魔力が込められた拳を構えるでもなく感卦法を使うことも無く受けたため、タカミチはきりもみ状態になりながら窓の外へと放り出され暗闇の中へと消えていった。

「ジジイ、私の知っていることはすべて話したぞ。ではな」

学園長の拷問が効いていないことがわかつていてるエヴァは、それだけを告げるとマントをひるがえしそのまま闇の中へと消えていった。

「ふう・・・やはりバレとったのか。つまらんのよ。わあてタカミチ君を回収してやらねばのぉ」

それだけ言つと、その老人は窓の外へと身を乗り出し夜の闇へと消えていった。

## おまけ編

(本編の続き的な流れで入っていますが、i-fの世界です。この話の設定が続くわけではありませんので注意)

### おまけ1

ネタ？ いえシモネタです。

「先生の寝顔かわいいなあ」

アスナはその日の夕刊を配り終え帰宅しようとしていたところ、愛しの高畠先生が森の側で倒れていたため神様からの贈り物だと喜んで自宅へとお持ち帰りした。

好きな男性との一夜、しかも今日は親友のこのかは図書館組みの方にお泊りとなつており一人つきりの状態だった。しかし、さすがの暴走少女であるアスナでも倒れているような体調が悪い人を襲うようなことができるはずもなく、寝顔をスケッチブックに色々な角度から描いて一晩を過ごした。

そして上半身から下半身を描こうとしたところで、えんぴつを持つ手の動きが止まった。

「おっさ、高畠先生ってやつぱり男の人なんだ・・・

「アスナ君僕は昔から男だよ？」

「くつ？ 起きてたんですか？ いえその・・・朝だから男のあれがゴーマゴーマ」

「昔から親みたいな位置にいたから母親と思い込んでいたのか。  
それはわるかつたなあ」

「いや、別にそんな勘違いをしていたわけでは・・・高畠先生って  
ちょっと朝が弱いのかそれとも頭が？」

「それに今まで銭湯でも男湯に入つて行つたのを見たことがあるだろ  
？もし女だったら危ない人じゃないか・・・いや男としてはうれし  
いんだけどね」

「先生つて朝弱いんですね・・・セクハラはキモチワルイですよ」

「え？僕は紳士だから女性にはとってもキモチイイ事をしてあげ  
死ね！」フギヤア！

「ふう、悪霊でも乗り移つてたのね・・・悪霊退散つと

アスナの拳が効いたのか高畠先生と悪霊は萎え、一度と立ち上がる  
ことは無かった。

おまけ2（シモネタではありません！）

次の日、そこにはいつになく真剣な目をした学園長がいた。

「タカミチ君、君に重大な任務を与える」

「へっ？ どうしたんですか学園長？ そんな真面目な顔をするなんて」

「うるさいわ！ 最近は君もずいぶん言いつようになつたのう。 まあ今はそんなことよりも大変なことがあるのじゃ…」

「確かに、エヴァの魔力の問題はまだしもあの悪魔への対抗策は必要でしょ？」

「うむ、しかしそれ以上に大変なことになつたのじゃ！ 夜になんとかエヴァともう一度接触したいと思つたが本人からでは話も聞いてくれんと思い茶々丸君と接触したんじゃ」

「まあたしかに昨日は魔力も戻つてかテンションがいつもより高かつたですからね。 大丈夫とは思いますが落ち着いてからのほうがいいでしよう」

「うむ、そこで茶々丸君にそのことで間を取り持つ役を頼もうと思つたのじゃ。 しかしワシが話しかけたところで突然逃げ出されてのお。 しかたなしに追いかけて『特に攻撃するつもりはない』と言つて彼女の腕を掴んだのじゃが…」

「エヴァは大丈夫だけど、茶々丸君は戦闘はできるが戦闘向きではないからエヴァから逃げ出すよつに指示があつたのかも知れないなあ」

ハハハと爽やかに笑うタカミチとは対象的に学園長は怒りの形相で怒鳴りだした。

「笑い事じゃないわい！あのあと指示があつたのじゃらうが茶々丸君が『もつ体を売るのは嫌なんです！』と言つて走つて逃げていったのじゃ、しかも本当に涙まで流しての。ワシはその言葉に驚いて手を離してしまつたのじゃが・・・しかし運が悪いことにその場面を孫娘のこのかに見られてしまつての。そこからはもつエヴァの拷問で聞かされた言葉よりも汚い言葉を吐き続けられて・・・ワシこのままじゃ本当に死んでしまう！あの悪魔よりもまづはこのかとの仲を回復するのに力をいれてくれい！頼む！」

学園長室には昨日よりも老けて見える老人と、世界の平和か老人の心の平和、どちらを優先するか悩むおっさんがいた。  
そして数時間もその部屋にいることになつたのだが、それはタカミチが『何よりも孫娘との関係改善に力を入れます』との契約書を書くまで学園長がタカミチの泣きじやくりながら袖を離さなかつたためらしい。

悪い奴ほど裏がなく、いい奴ほど裏があるー オマケ付き（後書き）

エヴァが進まねえ

つまらないかもしねー・・・しかしそれでもオレには初作品なわけ

あちひもがんばります。

## 一話修正してみたのを公開（続かないと思つよ（前書き）

気に入らない表現や会話を修正していつたら別の物語になってしまつたんだ。

これが孔明の罷つてやつか

年に1回更新すればええかなーって程度で活動するかも？

最近の一言ー

仕事が急がしいいいい

## 一話修正してみたのを公開（続かないと思つよ

ビビビ・・・

ウイイイイイイイン・・・

パンッパンッパンッ・・・

死ねええええ・・・

ウルサイ、オレ様の部屋を改装するよ[定]なびあつたか？

まるで自分の隣で工事が行われてこるよ[定]な・・・

ドリルの音かと思えばチーンソーのような、中には銃声やらいかにもアホそうな声まで聞えたよ[定]な。

くつそお小さい癖にいつの間にか頑丈になりやがって・・・あつそうだ捨ててきてしまえばいいんだ。

やつと静かになつた、ただ急に冷えだした。まあこの程度、超魔王になつたオレ様には涼しい程度だがな。

さよなら魔王様～プリンの恨みは恐ろしいのだ！時空ゲートをこの世界以外のランダムにしてつと・・・よし、でわ行つてらっしゃいませ魔王様、魔王城は私がもううわっ！

ポイッ！

アホな声が聞えたと思つたらすぐに静かになつた、これで静かに眠、  
れ・・・る。

100年後

「ねえ、これは何かな？チャチャゼロ」

そこには、某魔神に捨てられてからも動くことなく寝続けた結果、砂に埋もれ、雨に晒され続けた結果、自称超魔王を名乗つている人物は100年の長い年月によつて表面を石のように硬くなつた土に覆われてしまつてゐるのだった。

そしてそれを見つけたのは吸血鬼化してまだ十数年ほど、後のドールマスターの異名を持つことになるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとその従者チャチャゼロだった。

「サアナ、デモコノ魔力はスゲエゼ御主人。モツテ帰レバ何力使イ道ガアルカモシレネエゼ」

「言葉遣いはもうちょっとどうにかならないの？でもそうだね土に覆われているみたいだけど形から見るに人が入っているのかな？」

「御主人ハコレカラ何百年ト生キルンダゼ？言葉ナンテスグニ荒クナルツチマウツテ。ソレヨリコイツハ人ジャナイダロ、随分ト長イ間ココニ横タワツティタンダロウゼ、デナケリヤコンナ土ニ覆ワレネエツテ」

「言葉遣いは兎も角として。とにかくもつて帰ろう、この魔力を私が扱えるようになれば自分の身を守るのに使えるはず」

「アーアー、御主人ハ考工ガ甘イゼ？考工方モ時間ガタテバ狡猾二ナルダロウケドヨ」

「文句言いわない！ほら、足を持つて…コイツをもつて帰るよ」

「アイサー御主人」

それから100年後

「おいチャチャゼロ！100年も研究るんだ、お前も何か考え付かんのか！？」

「知ラネエヨ、ソレヨリモソイツノ魔力ヲ隠スアイテムヲ早ク作ツ  
テクレ。ヤツラ、ソイツノ魔力ニ釣ラレテジヤウジヤ集マツテクル  
ゼ」

「わかつたわかつた、でももう100年も戦つてゐるんだ、國から軍  
でも出されない限り大丈夫だろ」

「最近ノ御主人ハマツタク戦ツテナイダロ！マア切り刻ムノモ悪ク  
ハネエケドナ」

「おいつ言葉遣い！つたく100年間まつたくの進歩なしかチャチ  
ヤゼロ」

「まつたくお前には学習と言つ言葉が「既ニ御主人モコツチ側ダケ  
ドナー、マァイイ。外の掃除ニ行ツテクゼ」

「はいはいっすぐ終わらせてこ・・・来なさいよ

「アイアイコイテキマスゼ御主人ー」

「あとで泣かす！！」

さらば100年後

「つたくこの土男、魔力はあるはずなのに多すぎて私の作ったアイ  
テムが壊れるじゃないか。壊して意識が戻ると困るから手が出せな  
いことをいいことに・・・実はコイツ意識があるんじゃないかな？」

「ケケケツ、御主人。意識ガアルノニ一〇〇年モ士ニシツマレテルヤツガイルンダヨ。ドーセ封印テモサレテルンダロ」

「ソレヨリ御主人、今回は軍ガ動イテルミテュダゼ？ヤリガイハアルガ流石ニ俺一人ジヤ厳シイゾ」

「ああ最近攻めてきてるのは西の奴らだつたか？ふう、別の場所を探さないとな。さつさと終わらせる！行くぞチャチャゼロ！！」

「オウヨツ一右側ハ俺ニヤラセテモラウゼ」

そこからざりに100年後

「おーいチャチャゼロ、このゴミをどこか倉庫に入れるぞ。期待はずれだ、コイツ役に立たん！」

「諦メルノ力御主人」

「こいつに100年も時間を費やすより魔法を開発したほうが効率がよさそうなんだ。それにこいつの魔力、かなり禍々しくて私には使えそうに無い」

「ケケケツ、コイツ闇魔法ナンテノ使エタリスルンカモナ」

「闇魔法・・・か。それだチャチャゼロ！お前にしてはよくやった。」

次の魔法はソレで決まりだ！」

「コイツハドウスンダヨ？」

「そんなものそこらにでも転がしておけ」

「了解、倉庫ニテモ入レテオクゼ御主人」

またさらに100年後

「闇魔法も完璧になつたな！この魔法は魔力許容量が膨大な私には  
なかなかに使える！」

「ヤツタナ御主人。デモヨ、ナンテ闇魔法ナンテ思イツイタンダ？」

「ん？何か理由があつたような……いや、私が天才だからだ！」

「自分で言ウコトカヨ」

「うるさい！しかしこれで私達は堂々と『悪の魔法使い』を名乗れる  
るな」

「ケケケツ、御主人ニハオ似合イの称号ダナ」

「なんと言つても私達は……」

「『『『誇りある悪』だからな！』」「

「フハハハハハハハハハ！」

「ケケケケケケケケケケケ！」

それから100年後

「なあチヤチヤゼロ、暇だから昔やり残していた研究をしようと思つてゐるのだが・・・何だつたか覚えていいか？」

「ケケケツ、俺ガ覚エテルワケネエジヤネエカヨ」

「そとか、なら今考えている奴を作るか」

「ン？ 何力新シイコトヲスルノ力？」

「プラス」型の別荘で通常とは違つた時間の流れを作り出そうと考  
え中だ」

「オイオイ、俺ラハ時間ナンテ余ツテルダロウニワザワザ・・・

「研究して作るのがいい暇つぶしになるんだ、別にお前は手伝つ氣  
がないのだろうから文句を言つな」

「昔ノ純粹ダツタ御主人ガ恋シイゼ、カムバツク御主人ーーー！」

「やかましいわー！」

「ダッテ暇ダモノ」

そこからまたまた100年後

「くつたお、なぜだナギー！」

「わりいな、お前の荷物も学園の方には送つておこしてやるか

結局どれだけ言つてもナギの一方的な会話で話は打ち切られ、そのまま麻帆良学園都市に送られたこととなつた。

「ちつ納得はいかんが3年の辛抱、気分だけでも味わつたりで行つてやるか

「ケケケツ、俺ハ3年モ置物扱イカヨツマンネ」

それから15年後

とある学園、その森の中にはひつそりと建つてゐるログハウスの中・

「まったく、あいつはどこで何をしてるのだ！3年のはずが15年になりなぜかあいつの子供が来るそうじゃないか・・・まったく恥々しい。」

「マスター」の大型の土はびつしましょ~♪?

「私は機嫌が悪いんだ！特に魔力を感じないものなら必要ないからまとめて家の裏に行つて燃やしてしまえ！」

「人型の胸についている白い羽のバッジからは微弱ですが魔力を感じるのですが・・・」

「ああ、それは昔私が作ったマジックアイテムだ。確か魔力を抑えるモノだったはずだが・・・まあ覚えてないならどうでもいいだろ、耐熱加工してあるから燃えカスの中からを最後に探しておけ」

「了解ですマスター、それでは行つてきます」

「フフン！今回の妹はどうだ？お前に比べて随分と従順じゃないか」

「ケツ、御主人が頼りナイカラ妹ハアンナ性格二ナツタンダゼ。アマリ苦労サセンナヨ御主人」

「ならお前の性格はなんだと呟つのだ、昔から呟つことを聞かないではないか」

「昔ノ御主人ハ優シカツタゼ。今ハ捻タ性格ニナツテルケドナ」

「お前は昔から口が悪いと……」

と口論（エヴァの一方的な）しているところに茶々丸があわてて戻つてきた。

「マ、マスター！」

「ん？ どうかした茶々丸」

「あの、マスターから廃棄するよう指示のあつた人型の土、その中から人のようなものが出てきました！」

「なに！ どういう理由で土の中に居たのかしらないが殺してしまつたのなら仕方が無い、ジジイにばれる前に遺棄してしまえ」

「いえ、人に似ているのですが人ではないようです……焼却炉の中でも普通に呼吸をしているようなので恐らくですが生きています」

「ほう？ おいチャチャゼロ、以前に作った失敗作に呼吸ができるような人形など作ったか？」

「シリネー！」

「チツ おい茶々丸、焼却炉に案内しろ」

茶々丸に案内されて着いた先では焼却炉の中で子供が平然と横になっていた。

「なあ茶々丸」

「はい、なんでしょうマスター」

「コイツ、まだ焼却炉の中にいるように見えるのだが・・・」

「はいマスター、焼却炉の中にいますね」

「お前は何も思わんのか?」

「大変気持ちのよさそうに寝ている子供が「アホか貴様!」と一して  
焼却炉の火を止めるなり助け出さなかつた!?」・・・特に命令が  
なかつたので」

「あ、頭が痛い・・・貴様には一度、道徳といつもの教えんとな  
らんようだ」

「しかしコイツ本当に生きているようだな。よし、この棒を穴に中  
に突っ込んでやろう」

エヴァが土がはげて顎になつた物体A（人型）の鼻にクシャミを誘  
うかのように鼻の穴に抜き差ししている。

なぜかエヴァの横にいる茶々丸は腰をクネクネさせているが・・・。

「なあ茶々丸？保健体育は習得しているのか？」

「ハイ！どんな体位も完璧です（キリッ」

「（クーリングオフって何日だったかな？  
できれば姉も引き取つてくれると助かるのだが）」

残念な従者に哀れな視線を向けるのだが何を勘違いしたのか照れている本当に残念な従者がいた。

「その、まだマスターには早いと思うのです・・・しかし！しかしですよマスター！マスターが求めるのならばコチラが攻めで手を打ちましょう！！取りあえず私が姉でSです。マスターがが妹でM。どうせなら姉さんも巻き込んで3姉妹プレイなんていかがでしょうか？Sは私だけで十分ですから姉さんにも神経をつけてあげてM調きよ」「だまれよポンコツ」

「さすがの私でもココまでコケにするとは思わなかつ「ふう仕方がありませんね。フフフッ、マスターもSへいらっしゃい」

指を一本一本折り曲げ、怪しげな雰囲気をかもしながら誘つている。

「おい、何を勘違いしている！いい加減その方向の発言はやめんか！」

「いいえ！私はSです。そこは譲れない！なぜなら私のぽりすい（キリッ）

「だから～・・・SMちがつわボケエエエエエ」

「私はS、それが私のジャステイス（キリッ  
しかし、ぱりすいも捨てがたい。そつは思いませんかマスター？」

「フツ、フフフ、フハハハハハハ、貴様のマイクはイカれている

ようだ！貴様を解体し、あのマッド共に呑みつけてくれる……」「

「ふふっ、貴様に私が倒せるかな？来い！魔王よ……」

「おい、魔王が挑戦者っぽくなつてゐるが、つてだーれが魔王か！！」

「マスター（魔王）はあと2回の変身を残してくる」

「残しどらんわあああああ」

怒りのあまりエヴァの髪が逆立ち周囲には負のオーラが立ち上つていた。

しかし、茶々丸に登録されている辞書には自重の文字は残念ながら存在しなかつた。

「まつまさか！伝説のスーパーの野菜人！！

これは今晚のおかずには二ソニクとネギをふんだんに使用した野菜炒めを・・・」

「茶々丸うううー覚悟おおおおお」

その夜・・・

「グスン・・・初めてがネギって・・・ネギって・・・」

「大丈夫、よくある」とです。それよりも始めては今日ですべて終えてしまごましょう」

その夜から、学園のはずれにある森から幼女の悲鳴が聞こえる怪談  
が噂されるようになった。

1話修正してみたのを公開（続かないと思つよ（後書き）

えいこになつた！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7582k/>

---

麻帆良戦記ディスガイア

2011年10月6日16時31分発行